

辰野 隆

火野葦平氏とともに

火野葦平氏とともに

「何か面白い話はありませんかね。」

と、大学院風来坊が、いつもながら、大学は出ても当分就職口はないという空腹高心面を見せて、老書生の書齋兼食堂兼居間兼寢室の座敷にはいつて来る。

「別に面白い話もないが。」

と、老書生は暫く考えてから、

「うん、そうそう。君と話そうと思っていたことが一つあるのだ。」とおもむろに語り出した。「実は九月末か

ら十月中旬にかけて火野葦平君と一緒に、九州、中国の講演旅行をしたのは君も知ってる通りだが、ある晩、二人で酒を飲んでいと……」

「お互いに酒豪だから、酒を飲むならある晩と限らずとも毎晩でしよう。」

「まあ弥次らずに聴くがいい。毎晩のうちのある晩と思え。毎日飲んでいたからある朝でも、ある昼でもいいのだが、まげてある晩としておこう。そのある晩のこと、火野君が、一杯機嫌で自分は近ごろキョーサイ組合という会を設立しようと思つて、しきりに考を練っている、

といい出したのだ。」

「共済組合ですか。」

「まあ待て。昨年亡くなられた葦平さんの厳君は、北九州きつての大親分だったし、葦平さんにも親ゆずりの俠気がたつぷりあるから、恐らく北九州に孤児院でも建てる企図かと思っただ。ところが、そのキョーサイ組合というのは、実は恐妻組合だった。」

「恐妻組合って何です。」

「やっぱり未婚者は血のめぐりが悪いな。要するに、亭主というものは、如何に亭主関白の位とか何とか威張っ

ていても、何処かに女房をおそれ、山の神のたたりに着かされていない者はない。如何に穩健な妻にも、ヒステリ的の原爆が潜在的に貯えられている。意外な時に、何処で爆発するか、たれにも予測出来ないのだ。そこで、世の亭主たる人種は互に固く手を握り合つて、緊密な連絡を取つて、爆発を未然に防がなければならん。しかし、その連絡や団結が一度女類側にもれたら、たちまち組合の組織が破れるのだから、どうしてもこの組合は秘密結社にしなければならん。」

「秘密結社はよかつた。アツハツハ……」

「全く、葦平さんの話しぶりには、掬すべきユーモアがあつて、聴いてるわしも感服したんだ。ところが葦平さんが心配しているのは、この恐妻組合は、設立に賛成する会員が意外に増大するのではないか、ふえすぎるのではないか、ということなのだ。顧問、賛助員、正会員、準会員、ウエーディング・メンバー。我も我もと、極めて隠密に、人知れず、土用浪のうねりのように押し寄せるにきまつている。期年にして超満員になるのではなからうか。そこで、年一回かあるいは春秋二回の総会を開こうにも、会員を容れるに足る広い場所を見つけるのが

非常に困難ではないか。恐らく宮城広場でも少し狭すぎるのではなからうか、という話なのだ。」

「いやどうも恐れ入りましたな、近ごろ、正に、面白い思いつきの随一ですね。この話を骨子として、卓れた現代ユーモア小説が組み立てられるのではないでしょうか。これは、やっぱり、いいだし屁で、火野大人に書いてもらった方がいいと思いますね。」

「わしもそう思う。そこで、恐妻組合の会長をだれにしようかということも極めて重大な関心事なのだ。火野説に依れば、むくつけきヒゲ男で柔剣道はともに五段以上、

日ごろ嬢などは虫けら同然なようにいい振らしているが
ら、実は、恐妻病の親玉という男に限る。こういいなが
ら葦平さんは『先生、一寸御面相を拝見しましょう！』
と、人相見の眼鏡を取り出したのには、わしも驚いたよ。」

（昭和二十八年六月）

日本文学電子図書館

火野葦平氏とともに

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館